迷子の遊園地 FINAL ACT

Black or White

藤田ヒロシ

登場人物

遠山　藍　（女優の卵）

村上　美咲（照明家の卵）

緑川　恭子（藍のルームメイト）

三木　茂　（中堅の大道具係）

演出家

公園の親子

女優　浅見

恭子の元恋人　徹

女子高生

中年男

隣人の男

1　人々の歩く姿と、捨てられた空き缶

2　この作品のためのタイトル

3　小さなキッチン

ヘッドフォンで大音量の音楽を流し、踊るようにして朝食を作る恭子。

そのあざやかな手さばきで、キャベツは細く着られ、トマトは鋭く着られ、パルメザンチーズは華やかに舞う。

恭子が、フライパンにベーコンをおとしたとき、藍があらわれた。

だらりとしたルームウェアを着て、いかにも「寝起きです」といった藍の姿を見て、恭子は、ハイテンションで言う。

恭子　グッド・モーニング！

藍　・・・おはよ。

恭子　チッ、チッ、チッ。グッド・モーニング！！（へんてこなポーズ）

「チン」っと、トースターがなく。

4　食卓

朝食を食べている藍と恭子。

恭子の前にはサラダ、ベーコンエッグ、トースト、カプチーノか並び、藍の前には、ミルクにひたったシリアル。

恭子　今度の金曜、オフなんだよね？

藍　金曜？たしか事務所の当番。

恭子　昼間で終わるよね？

藍　たぶん。

恭子　遊びいかない？ひさしぶりに、騒いじゃうってのは、どうでしょう？（と、チケットを差し出す）

藍　・・・。

恭子　昨日、佳世たちと飲みに行ったら、隣のテーブルの男の子達が「観にきて下さい」って。

藍　くれたの？

恭子　なんか、必死で可愛かったからさ。ちょっとテレながら「おネエさん」って。

藍　年下。珍しいね。

恭子　たまにはいいかなって、「青い果実」

藍　何時に、どこ？

恭子　7時からZEROで。

藍　パンク？ハード？フォークはだめよ、フォークは。

恭子　知らない。聞かなかった。別にいいじゃん、ジャンルなんて。それより大事なのは、ギターの子が可愛いって事。

藍　ギターの・・・昔もあったね、そんな事。

恭子　あれは顔じゃないよ。あれは、あの指の動き。ソロの時の滑らかで、激しいあの指の動き。百戦錬磨のテクニック。一度、試してみたくあるもの、女ですから。あの子はきっと、ぎこちない。それもまたよし。

藍　分からないよ。年下でも男。

恭子　それはそれでなおよし！男も女もギャップが大事。

藍　見に行くのはいいけど、その後は付き合わないよ。

食べ終わった皿を手に立ち上がる。

5　自動販売機

男が、眠た気な顔をして缶コーヒーを買っている。その横を、カバンを肩にかけた藍が通り抜けてゆく。

彼女の後ろ姿を眺めながら、コーヒーを飲む男。

6　劇場の照明倉庫

明かりをつける美咲。手にはテイクアウトしたコーヒーの入っている紙袋を持っている。部屋の隅にある椅子に腰　掛けて、コーヒーを取り出す。熱そうにそれをすする。

7　小さなキッチン

食器を洗い終わって手を拭く恭子。2杯目のカプチーノを入れて、テーブルに座る。テーブルには、ライブのチケット。それ　を　そっと手にする。

8　劇場のロビー

女優と演出家が並んでタバコをふかしている。

女優　私に聞くまでもないことなんじゃないの？

演出家　君の目には、僕とは違うかたちで映っているかも知れないからね。

女優　人の意見をきこうなんて、丸くなったのね。

演出家　（大きく煙りを吐き）で、そうなんだ？

女優　悪くないんじゃない。それが、昨日の感想。当たり前だけど、あなたの世界は男のそれで・・・たまには女を信じてみれば・・・。

タバコを灰皿に落とし去ってゆく女優。

すれ違うように藍が現れる。

藍　おはようございます！！

女優　おはよ。

藍　（演出家に気付き）おはようございます！！

演出家　（タバコを消す）

無言の演出家に一礼して去ろうとする藍。

演出家　遠山。

藍　はい！

演出家、立ち上がりすれ違い様に藍に何かを伝えた。

藍　はい？

演出家　坂口にも伝えておけ。

演出家、立ち去る。それを隅から観ていた女優。

立ち尽くす藍。握りこぶしが、しだいに力を帯びてくる。そして、

藍　なんで。

持っていたカバンを床に投げ付け、した唇を強く噛む藍。

ＮＡ　稽古に入る前に、聞いてくれ、今日から遠山と坂口を入れ替える。坂口、頼むな。

投げ釣られたカバンから、台本がちらりと見えている。

９　（回想）藍たちの部屋

恭子の姿を観るなり飛びつく藍。

恭子　何？ちょっと！

藍　やったよ！やったんだって。

恭子　誰と？

藍　（恭子から離れ）それしか入ってないのか？そんなことじゃなくて、次の舞台の役が決まったの！

恭子　まさか！主役！

藍　そんなわけ。

恭子　ないよね。

藍　出番は少ないけど、いい役なの。

恭子　出番は少ないけど、いい役？何それ？いい役って、出番の多い役の事いうんじゃないの？

藍　役は出番のか量じゃないの。いい役かどうかっていうのは、いろんな考え方あるし、人によっても違うけど、私の場合は、どれだけストーリー展開に対して重要な台詞があるかとか・・・。

恭子　ストップ！

藍　なんで？

恭子　藍が芝居の話始めると、長いから。

藍　今日くらい、話させてよ。それでも友だちなわけ？

恭子　多分。

藍　何それ。

恭子　だから、お祝しよう！おごる。話はそこで。

１０　劇場のロビー

カバンからのぞく台本。立ちすくむ藍。

１１　照明倉庫

誰もいないそこへ藍が入ってくる。

棚に整理された照明を眺めながら、奥へと入ってゆく。

藍が灯体に手を触れようとした時。

美咲　触るな！

藍　（びっくりして手を引っ込める）

美咲　勝手にいじらないで。

藍　ごめんなさい。

美咲　それに、勝手に入らないで。

藍　ごめんなさい。

そんな会話をしながら、美咲は両手に２個づつ持っていた灯体を棚に片付けてつく。

そして、別の灯体を取り出し、レンズを磨き出す。それを見つめる藍。

藍　美咲さん、どれくらいになるんですか？

美咲　ここに入って？それとも照明始めて？

藍　照明で入ったんじゃないんですか？

美咲　ちがう。

藍　どうして照明に？

美咲　誘われたから。チーフに。

藍　そうだったんですか・・・。

美咲　何しにきたの？

藍　・・・一人になりたかったから。

美咲　ここは引きこもり部屋じゃないんだけど。

藍　ごめんなさい。

美咲　役おろされたから？

藍　なんで、私じゃ・・・しかも、今年入ったばっかの坂口なんかと・・・彼女まだ新人の研修プログラム終わってないんですよ。なのになんで、台詞・・・お

かしいじゃん。最低プログラム終える間では立てないんでしょ舞台。

美咲　あんた、馬鹿？

藍　（むっとした表情）

美咲　確かに決まってるけど、関係ないでしょ、そんなこと。「劇団運営に民主主義はあっても、芝居作りに民主主義はない」

藍　・・・。

美咲　ある演出家が団員になってない研修生を本公演の主役にした時の言葉。そう言う世界でしょ、ここ。

藍　才能？

美咲　本当、馬鹿だね。

藍　何がですか？

美咲　馬鹿に芝居はできない。

藍　・・・。

座り込む藍。それを、無視するように、黙々と灯体メンテする美咲。

１２　小さなキッチン

恭子、例のごとく踊りながら、朝食を作っている。

そこへ現われた藍。あいさつもせずに、シリアルを皿に流し、ミルクを注ぐ。そして、一人で食べはじめる。

恭子　・・・。

藍　あのさぁ。金曜の話、キャンセル。

恭子　なんで？

藍　気分じゃない。

恭子　金曜になれば、気分変わるかも。

藍　・・・。

恭子　息抜き、必要じゃない？

藍　・・・。

恭子　しばらくオフないでしょ？

藍　ホント、気分じゃないから。

まだ残っている皿を手に立ち上がる藍。三角コーナーに残飯を捨てる。

１３　自動販売機

男が、眠た気な顔をして缶コーヒーを買っている。その横を、カバンを肩にかけた藍が通り抜けてゆく。

彼女の後ろ姿を眺めながら、コーヒーを飲む男。

１４　照明倉庫

明かりをつける美咲。手にはテイクアウトしたコーヒーの入っている紙袋を持っている。部屋の隅にある椅子に腰掛けて、コーヒーを取り出す。熱そうにそれをすする。

１５　小さなキッチン

食器を洗い終わって手を拭く恭子。２杯目のカプチーノを入れて、テーブルに座る。

１６　照明倉庫

カラーフィルターを整理している美咲。そこへ女優が現れる。

女優　ちょっといいかしら？

美咲　（驚いて）おはようございます。

女優　おはよ。ずいぶん早いのね。

美咲　浅見さんこそ。

女優　あなたとちょっと話がしたくてね。いい？

美咲　どうぞ。（椅子を差し出す）

女優　ありがと。色の整理？大変ね。

美咲　いえ。

女優　私が入ったばかりの頃は、劇団員が少なくて、全員が役者で、全員がスタッフ、そんな感じだった。だから、私もやったのよ。つり込みも、色整理も、レンズ磨きも。

美咲　聞いたことはあります、チーフから。

女優　それじゃ、私が照明家になろうとしたのは、聞いたことある？

美咲　いいえ。そんなこと、あったんですか？

女優　けっこう楽しかったから。照明部を作るって決まった時ね、立候補したんだけど、落選。

美咲　役者として必要だったからでしょ？

女優　そうなのかな。

美咲　そうですよ。

女優　だから、照明って気になるのね。「自分をきれいに見せてくれる」とかそう言うのとは別の意味で。

美咲　・・・。

女優　あのシーン。この前、稽古終わってから演出からいわれたでしょ？「なんであんなにトップから当てるんだ」「なんでフェードなんだ」って。

美咲　はい。でもあれは・・・。

女優　いいんじゃない。

美咲　え？

女優　たしかに「なんで」だよね。そう言う芝居の作り方じゃなかった。でも、ああいう作り方もありだと思う。私は気に入ってる。演出は気に入らなかったみたいだけどね。

美咲　私、納得できなかったんです。でも、昨日は言われるままに・・・。

女優　今日は、あなたの明かりでやっみて。例え、本番ではそれが通らなくても、今日は、今日からはやってみなさい。

美咲　・・・。

女優　また怒鳴られるのが恐い？

美咲　そういうわけじゃ。

女優　なら、お願いね。

美咲　わかりました。

１７　食卓

テーブルに両ひじをついて、チケットを眺めている恭子。「ZERO」という文字を見つめる。

恭子　何考えてんだ、馬鹿みたい。

チケットを手にし、やぶろうとする。

恭子　関係ないよ。ただライブに行くだけじゃん。関係ないよ。

チケットをテーブルに置く。

１８　ゼロの事務所

雑然としたそこで、徹が電話をしている

徹　その日は埋まってるなぁ。うん、一日。それはいくらなんでも無理ですよ。無理。確かにそうは思いますよ。でも、集客見込めるから、そちらにって、いかないでしょ普通。やってほしいけどさぁ。ごめんね。じゃ。

電話を切る。

徹　まずいことになったぞ。この日、何か入れないとなぁ。断っておいて、実は空いてたなんて、まずいしね。どこも断られてるんだろうなぁ。客呼べるのはいいけど、トラブルメーカーだからね。いいかげん気付いてくれよ。「ブラックリスト」なんだからさ。

電話がなる。電話のとなりに写真立てが有り、そこには徹と恭子が写っている。

徹　はい。ゼロです。

１９　照明倉庫

台本を見つめている美咲。意を決したようにそれを閉じると、倉庫の明かりを消して、出る。

そこへ、演出が通りかかる。

演出　遠山、見なかったか？

美咲　今日はまだ。

演出　そうか。

行こうとする演出を、美咲がとめる。

美咲　演出。私。

演出　稽古で見させてもらう。

美咲　お願いします。

去る、演出。三木とすれ違う。三木、首をふる。

美咲、三木を呼び止める

美咲　遠山、来てないんですか？

三木　いや、一度きているという話だよ。森山君がみかけたらしいから・・・ただね。

美咲　どうかしたんですか？

三木　見たと言うのが坂口と一緒のところらしくてね。昨日の今日だから。

美咲　坂口は？

三木　「知りません」だと。まぁ、こんなこと珍しいことじゃないから。いけね、この間に上手のパネル直さないと。

美咲　え？

三木　「もう少し、中までいれろ」だと、ということは、明かりもかわるな。よろしく。

小走りで去ってゆく三木。

美咲　えぇ？どれくらいであがります？

三木　２０分かな。

２０　公園

芝生が広がるそこには人陰はまばらで、藍は寝転んだ。空は高く、青い。

藍は空に向かって手を伸ばし、手のひらを握った。そして、力なくその手をおろす。

ＮＡ　ひさしぶりに、空を見た。実際はそんなことないのだろうけど、そんな気がする。この街の空は小さくて濁っていると思い込んでいた。ちょっとした発見。この街にも大きな青い空はある。子供の頃かなり本気で、雲に乗りたいと思っていた。たしか「ドラえもん」がそんな道具を持っていた。欲しかった。雲に乗りたかった。空に行きたかった。いつかいけると、信じていた。信じていればいつか叶うなんて言う大人の気休めを本気で信じた。だから、今まで信じてきた。そう疑っていなかった。笑っちゃう話だ。何の根拠もないのに、自信だけが私の中にあった。「女優になれる」そう、本気で信じてきた。

親子連れの３人が、遠くの方で遊んでいる。笑い声が、藍の耳も届いて、藍はそちらに目をやる。

藍は上半身だけ起して３人を眺める。

ＮＡ　高校を卒業する時「女優になる」と言った私にまわりの人たちは口々に「がんばって」言った。お決まりのコメント。感情なんてなかった。きっと本

音は「何言ってるの？気は確か？」だったのだろう。そんな中で、たったひとりだけ「夢を追い掛けるなんて簡単じゃないよ」と、言った人がいた。私は答えた「これは夢じゃない。目標なの」私にとって舞台に立つこと、女優に成ることは夢や憧れではなかった。今も変わらない。かわらないから・・・。

親子の幸せな姿が藍の目に強く、強く残った。

２１　食卓

テーブルに座って、携帯を眺めている恭子。その画面には「とおる」と言う名が浮かんでいる。

ＮＡ　なんか、このままって信じられないんだ。この先の２人のこと、おれにはもう何も見えないから。

２２　ＺＥＲＯの事務所

カップラーメンを啜っている徹。

ＮＡ　傷付かない別れなんてないんだから、そんな気を使って話さないでよ。

２３　藍たちの部屋

ドアベルが鳴る。はっと我に帰って、玄関に・・・数歩向かって、恭子は戻ってきた。テーブルの上の携帯を手にして玄関へと向かった。

ドアを開けると、美咲が立っている。

美咲　藍いる？

恭子　まだだけど、あなただれ？

美咲　同じ劇団の・・・、いないならいいや。それじゃ。

去ろうとする美咲。その背中にむかって、

恭子　藍に何かあったの？

美咲　本人に聞けば。

去ってゆく美咲。府に落ちない表情でドアを閉める恭子。

２４　夕暮れの街

歩きながら美咲が出る。電話の主は三木。少し酔っている感じだ。

三木　今どこ？今日はこないのか？いつもの店でみんな待ってるぞ。

美咲　今日はちょっと。いろいろと整理したいことが・・・。やっぱり、あのパネルもう尺外に意かないですかね。半分でもいいんですけど。

三木　だめだね。

美咲　でも、それじゃないと、シーリングが奥まで・・・。

三木　そのことじゃない。お前の頭の中には、明かりの、芝居の事しかないのか？息抜きしてるか？

美咲　してますよ、私なりに。

三木　ならいいけど、パネルの事は、おれからも、もう一度言ってみる。

美咲　ありがとうございます。

三木　それじゃ、お疲れ。

美咲　　お疲れさまです。

電話を切る美咲。

２５　小さなキッチン

ヘッドフォンで大音量の音楽を流し、踊るようにして朝食を作る恭子。

そのあざやかな手さばきで、キャベツは細く着られ、トマトは鋭く着られ、パルメザンチーズは華やかに舞う。

といったいつもの朝とその日はちがって動きがスロー。

テーブルについた恭子は、いつもより良く焼き過ぎてしまったトーストをかじる。

向いの席に藍はいない。

２６　自動販売機

男が、眠た気な顔をして缶コーヒーを買っている。その横を、カバンを肩にかけた藍が通り抜けていく。

いつもと違うのは藍が出かけるのではなく帰ってきたのだ

２７　照明倉庫の前

コーヒーの入った紙袋を手立つ美咲。そっとのぞくように入って行く。

そこには、誰もいない

２８　藍の部屋

壁にもたれ、床に座っている藍。床には、やぶられた台本が散乱している。

ＮＡ　もう、疲れた。

２９　フラッシュバックする藍の記憶。

稽古風景。仲間の笑顔。演出の怒鳴る姿。まばゆい光を放つ照明。などなど。

ＮＡ　そう、疲れた。

３０　散らばった台本が舞い上がる。

３１　藍の部屋のドアをノックする音

藍は反応しないが、恭子が入ってくる

恭子　昨日、劇団の人来たよ。

藍　・・・。

恭子　なんだか愛想のない人。

藍　・・・。

恭子　稽古行かなかったの？

藍　・・・。

恭子　稽古行かないの？

藍　ゼロ、いくんでしょ？いいの、時間？

恭子　まだ、時間あるから。

藍　逢いに行くんだ・・・。

恭子　・・・。

藍　どんな気分？思い続けるって？

恭子　・・・。

藍　受け入れてはもらえないのに、思い続けるってどんな気分？

恭子　・・・。

藍　手が届かないって分かっているのに、その手を伸ばすって、どんな気分？

恭子　・・・

藍　どんなにみじめ？

恭子　私はただ・・・。

藍　私は嫌だ！みじめな思いはしたくない。ずるずると引きずられたくはない。でも、どうして？捨てられない。私を必要とはしていないのに、私は必要としている。・・・かっこわるいね。

恭子　誰もカッコよくなんて生きられないよ

藍　いってらっしゃい。

ゆっくりと、床に倒れてゆく藍

３２　夜の街

街中を歩く恭子。美咲とすれ違う。

恭子　あっ。

美咲　？

恭子　藍なら、しばらく放っておいてあげて。

美咲　帰ってるの？

恭子　何があったか分からないけど、今は・・・。

美咲　そんな時間はないの、悪いけど。

行こうとする美咲の手をとる恭子。

恭子　今日は、止めて。

美咲　明日じゃもう遅い。

恭子　・・・。

美咲　止めてゆくやつなんて山といる。ほとんどが、そう。そんなやつの事いちいち気にかけていたら、時間が足りない。だから明日じゃもう遅い。明日に成れば、彼女ははじめからいなかった存在になる。

恭子　・・・。

美咲　（手をほどいて）伝えて、辞めるなら荷物引き取りにこいって。

３３　喫茶店

向かい合っている中年男と女子高生。

男が熱っぽく話し掛けているのとは対照的に、女子高生はさめた感じで、聴いている。

男がさんざん話をして、ひと呼吸入れるために、コーヒーをすすると、

女子高生　で、いくらくれる？

そのやり取りを、観ている美咲。

ＮＡ　「女には最後、カラダがあるからな」と、言っていた先輩がいた。確かにそれを使えば、男より簡単にお金は手に入る。実際そうやっているやつもいる。でもそれは、男が思う程簡単なことじゃない。眠い目を擦り、コンビニのレジを打っている方が・・・日雇いの肉体労働のほうが、簡単なことかも知れない。私が、５年で分かったことは、愚痴をこぼしたやつは、必ず退ってゆくと言うこと。

中年男　（指を１本立てて）どうかな？

女子高生　おじさん、ふざけないでよ。

中年男　それじゃあ、（と２本指をたてる）

女子高生　もう５０００ね。

中年男　う、うん。

女子高生　契約成立。

立ち上がる女子高生。

女子高生　何やってるの？いくよ、はやく。おじさん。

中年男　う、うん。

３４　藍の部屋

暗い部屋の中で、床に直に寝ている藍。ゆっくりと起き上がり、散乱した台本のかけら一枚を手にする。

そこに書かれていたのは、自分が演じるはずだった役の台詞。

「それは違うわ。本当に愛していたから、心から嫌いになるの」

台本を握りつぶし、涙を見せる藍。

３５　夜の街

腕を組んで歩く中年男と女子高生。

微笑みかける女子高生にてれ笑いをかえす中年男。すぐにクールにもどる女子高生。

立ち止まり、女子高生が、中年男の前に立つ。もう一度微笑む女子高生。

顔を近付けてゆい、耳もとで囁く。

女子高生　へたくそ。

それでも、テレ笑いをかえす中年男。

３６　ゼロの裏口

缶コーヒーを両手で包み、立っている恭子。

携帯を見る。「２２：２７」

缶コーヒーを啜る恭子。

３７　美咲の部屋

風呂上がりの美咲。髪をふきながら、冷蔵庫からビールを取り出す。

テーブルに付くと、そこには、多くの書き込みをされている台本がある。

３８　ＺＥＲＯの事務所

電源を消し、裏口方出てくる徹。

そこに恭子の姿はない。

３９　夜の道を走る恭子。

４０　勢い良く玄関を開け、恭子は藍の部屋に向かう。

恭子　教えてあげる。

そこには、泣きつかれた藍が座っている。

恭子　思い続ける気分。教えてあげる。馬鹿だと思うよ。どうにもならないのに、苦しいだけなのに忘れられないなんて、みじめな気分よ。でも、思い続けられものがあることは、悪い気分じゃない。

藍　・・・。

恭子　聞いてる？

藍　・・・。

恭子　辞めちゃだめ。

藍　会えなかったんでしょ?思い続けることすらできなくなるかも知れないからね。怖気づいた?

恭子　私が思っているのは、私が知っているあの人。知らない時間を重ねた2人が今逢っても・・・。

藍　出会えたかも知れないのに。新しい2人が・・・結局、恐いんでしょ。否定しきれないわずかな可能性にかけて見るのが恐かったんでしょ?失っちゃうもんね。身勝手に思い続けることもできなくなっちゃうもんね。そんな人間が私に「辞めるな」なんて言わないで。

恭子　・・・。

藍　全てをかけて、勝負できないのに、言わないで。私は、走ってきた。苦しんできた。犠牲にしてきた。賭けてきた。求めてきた。戦ってきた。簡単に「辞めないで」なんて言わないで。

恭子　藍がどれだけ思っているか知っているから、見てきたから。

藍　「本当に愛していたから、心から嫌いになるの」・・・覚悟はしてたから。

41　照明倉庫の前

藍、ゆっくりと中をのぞくが、誰もいない。

すると、後ろから声がする。

三木　村上なら演出のところだ。たぶん今頃、喧嘩してる。

藍　え?

三木　最近じゃ珍しいパイプだよ。自分の思っていることを真直ぐぶつけてくる。

藍　役者やってたってきいたんですけど。

三木　入って1年くらいかな。

藍　なんで、照明に？

三木　本人に聞いたか？

藍　「チーフに誘われた」って。

三木　（吹き出す）

藍　違うんですか？

三木　違ってはない。けど、だいぶ足りないな。あいつは役者として、期待されてた。ちょう今の坂口みたいなものかな。

藍　・・・。

三木　で、ある舞台で大役に抜てきされた。その稽古の時だ。見せ場のシーンの照明の事で揉めた。当時のチーフは若い時から演出と組んでる人で、その意見は絶対だった。プランの変更はなかった。その時言われたんだよ。「明かりの事なんて何もしらない癖に、生意気いうな」って。

藍　それで、照明に？

三木　本人が「そう」と言ったわけじゃないが、あいつの性格からして、よほど悔しかったんだろうよそれに、気付いたんだろうな。

藍　気付いた？

三木　期待され、優遇され、どこかで自惚れてた自分に。悔しかったんだろうよ。

藍　・・・。

三木　ところで、どうすんだ？

藍　・・・。

三木　一度弱気になったら、もう付いて来れないだろうな。芝居を始めたのはお前の勝手、辞めるのも同じだ。理由なんて幾らでもあるだろうし、大してないかも知れない。

藍　・・・。

三木　お前は負け犬だ。

藍　・・・。

三木　でもそれは、真剣勝負をしたと言う勲章だ。

藍　（泣きそうになりながら）失礼します。

走り去るように、その場を立ち去る藍。

４２　玄関

いつもより少し大きいバックを持った藍が外へ出てくる。

４３　照明倉庫

美咲が入ってくる。不機嫌そうだ。

三木　その様子じゃ、また決裂か。

美咲　いつまで、素人扱いなんですかね。

三木　認められたら、役者に戻るのか？

美咲　そんなつもりないですよ。

三木　いつ覚悟をきめた？

美咲　いつもなにも、はじめからそのつもりです。中途半端は嫌ですから。

台本を広げ、プランを練り直す美咲。

美咲　あのパネルどうにかなりませんかね。

三木　おれに言うな。

美咲　ですね。すみません。

三木　さっき遠山が来たよ。逢ったか？

美咲　いいえ。

三木　そうか。

美咲　どうするって・・・いえ、何でもないです。

三木　まぁ、パネルの事は諦めろ。今さら役者の動きを変えるわけにもいかないからな。

立ち去る三木。一人になり、黙々とプランを練り直す美咲。

ＮＡ　止めてゆくやつなんて山といる。ほとんどが、そう。そんなやつの事いちいち気にかけていたら、時間が足りない。だから明日じゃもう遅い。明日に成れば、彼女ははじめからいなかった存在になる。そうやって強気でい続けなければ、私も・・・。

４２　食卓

ひとりテーブルで、朝食を食べている恭子。

４３　自動販売機

男がいつものように自動販売機に向かうと、そこには旅行バックを持った藍が立っている。

藍は、そこで缶コーヒーを買う。２つ。

振り返ると、男に微笑みかけ、一つを手渡し、歩き出す。黙って藍の背中を見送る男。

と、立ち止まり、振り返る藍。

藍　　空き缶はしっかり捨てなさいよ。

微笑みを残し、桜並木の向こうに消えてゆく藍。

ＦＩＮ

無断使用・転用禁止